

## 東北水産研究レター No.8

メタデータ	言語: ja 出版者: 水産総合研究センター 公開日: 2024-03-05 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: メールアドレス: 所属:
URL	<a href="https://fra.repo.nii.ac.jp/records/2000407">https://fra.repo.nii.ac.jp/records/2000407</a>

This work is licensed under a Creative Commons Attribution 4.0 International License.



# 東北水産研究レター No. 8 (2008. 6)

## サメガレイの資源保護は待ったなし！

研究担当 資源評価研究室 服部 努



写真1. サメガレイ  
15年前の手紙を海底から届けてくれた魚として、脚光を浴びました。写真は全長40cm、年齢4歳程度と推定されます。

サメガレイは、日本周辺の深海500～1000mに棲むカレイです。表面が鮫肌のようにザラザラしているので、この名が付けられたそうです(写真1)。他のカレイ類より肉厚で、焼き魚や刺身にすると美味しいカレイです。縁側部分の肉に脂がのっているのが特徴で、薄切りのしゃぶしゃぶでも結構いけます(写真2)。



写真2.  
塩釜仲卸市場で売られていた30cm位のむき身になったサメガレイと刺身(右下)

東北水研のある塩釜近辺では、ホンダガレイと称されている。

今から30年以上前までは、東北地方太平洋側だけで1年間に約6千トンも漁獲されていましたが、ここ数年の漁獲量は最盛期の5%程度にまで落ち込んでいます。さらに、約30年前には成熟した親魚が宮城県沖から茨城県沖まで1～2月頃に広く分布していたのに、最近では分布域が茨城県沖に限られてきて、時期も3～4月にずれていることが分かりました(図1)。

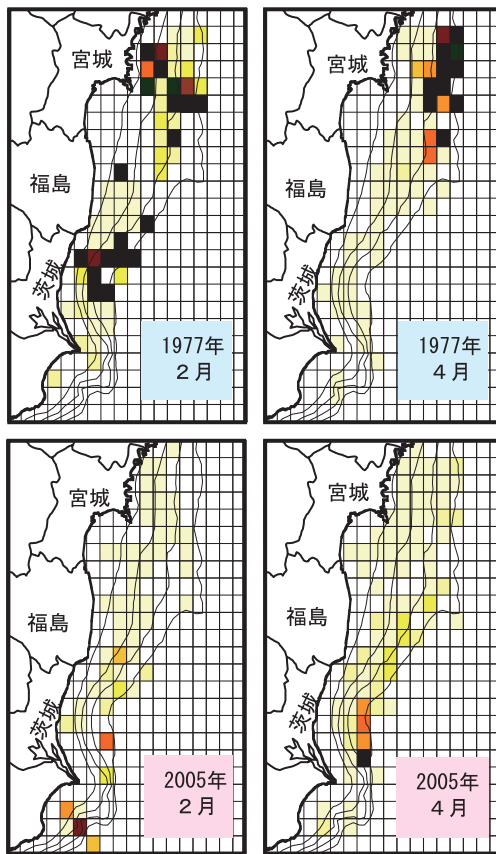
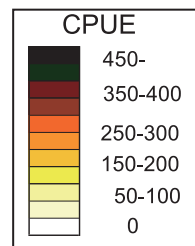


図1. サメガレイの分布。トロール漁業の1網当たりの漁獲重量 (CPUE, kg) を示す。

近年、この産卵場に集まった親魚が集中的に漁獲されており、このままでは資源が回復不可能になってしまう恐れがあります。



この現状を漁業者の方々にご理解いただき、産卵親魚の漁獲を抑えるなどの対策をとることが重要と考えています。

子持ちカレイは美味しくて高値で売れるため、獲るな、食べるなどと言われてもなかなか難しいのですが、沖合底曳き網ではマダラやスルメイカ等、東北地方を代表する美味しい魚もたくさん獲れます。これらを頂きながらサメガレイが増えるのを待とうではありませんか。



# 下痢性貝毒原因プランクトンの毒生産を初めて確認

研究担当

海区産業研究室

神山 孝史

(現：瀬戸内水研)



鈴木 敏之

(現：中央水研)



「貝毒」とは、ある種のプランクトンを捕食した二枚貝が、人間にとって有害な毒を蓄積する現象や蓄積する毒成分そのものを指す言葉です。日本では、中毒症状から麻痺性（唇や手足が痺れる型）と、下痢性（一過性の下痢を起こす型）の二つに分けられます。現在は、研究機関や業界が水揚げ前に貝の生産海域のプランクトンや貝を調べており、安全な貝だけが我々の食卓にのぼる流通システムとなっています。



写真1. 市場で売られている貝は安全です。

左：ホタテガイ  
右：カキ

しかし、貝に毒が蓄積されていることがわかると、市場への出荷がストップするため、貝毒発生は水産業に大きな痛手となります。そのため、貝の生産海域での貝毒発生を正確に予測することが必要で、そのためには貝毒発生の仕組みを解明することがとても重要です。

東北地方特有の問題である下痢性貝毒にはいくつかの謎があります。その一つは、原因プランクトンは分かっているのですが、それが本当に自分で毒を作るのかが分からないことです。それを明らかにするには、その原因プランクトンを培養することが必要ですが、長らく世界の誰もが培養できませんでした。しかし、2006年に韓国でその一種の培養に初めて



写真2. 代表的な下痢性貝毒原因プランクトン ディノフィシス アキュミナータ

成功しました。その後、当所でもテレオラックス *Teleaulax sp.* (植物プランクトン的一种) を餌として培養したミリオネクタ ルブラ *Myrionecta rubra* (繊毛虫の仲間) を餌として与えることで、主な下痢性貝毒の原因プランクトンの1つであるディノフィシス アキュミナータ *Dinophysis acuminata* (写真2) の培養に成功しました。そして、我々は培養実験下でディノフィシス アキュミナータ自身が、貝毒を作っていることを世界で初めて証明し、長年の謎の一つを解明しました(図1)。

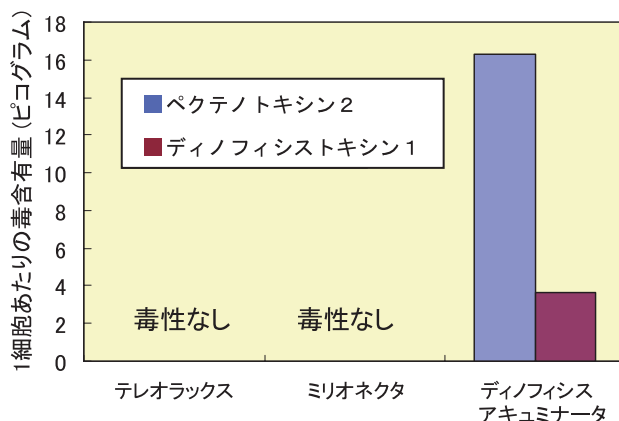


図1. 培養されたディノフィシス アキュミナータから検出された2種類の下痢性貝毒成分の含有量。ディノフィシスの餌であるミリオネクタとその餌となるテレオラックスには毒は検出されない。

この発見によって、今後、プランクトンの持つ毒がどのような時に強くなったり弱くなったりするかが近いうちに解明され、下痢性貝毒発生の予測技術の開発への道が拓けると期待されます。我々研究機関は、漁業者と行政の連携により、安心して食べることができる良質のホタテガイやカキ等を計画的に生産できる仕組みづくりを推進していきたいと考えています。